



同窓会だより

4年ぶりのリアルな〇×

副会長 野内 昭 宏

ここ最近、「4年ぶりの開催」という見出しなどをよく見かけます。そう、COVID-19が日本に上陸した2020年の年頭から、あらゆる会合等の開催の自粛、中止、またはWEBでの開催が要請されてきました。しかし、この5月から感染法上の位置づけが2類相当から5類になったのを契機に、(もちろん、適切な感染対策をしての上ですが)社会経済活動を回していこうということで、少しずつ以前の開催形態に戻りつつあります。

当然、同窓会活動もその影響を受けました。例えば、同窓会創立50周年記念事業に関する会議は、そのほとんどがZOOM上での開催でした。ZOOMの「ズ」の字も知らなかった4年前とは隔世の感があります。

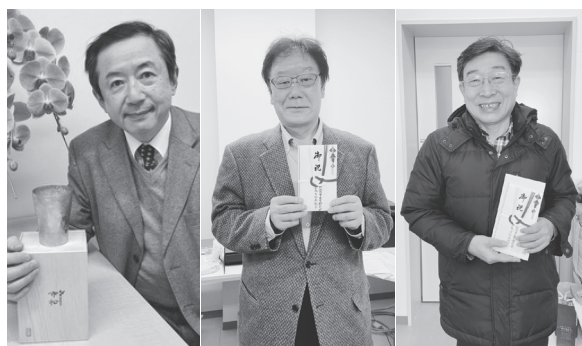
50周年といえば、記念事業の一つに「歯学部への記念品贈呈」があります。歯学部と相談の上、「WEB会議システム一式」を贈呈することとなり、目録は昨年の記念式典の際に贈呈しました。実際のシステム構成については歯学部と検討を重ねた上で講堂と大会議室に導入しまして、2023年の年頭から本格稼働できるようになりました。

今年度最初の当会の総会と学術講演会に際して

は、そのシステムを使ってハイブリッド形式で行いましたが、今まで構築していたシステムよりも、ずっと快適に行うことができました。

さて、その他の活動報告です。

昨年12月末で大学を退職された小野高裕教授、そして、この3月末に定年退職された高橋英樹教授と天谷吉宏准教授に、それぞれ退職の記念品をお贈りしました。3名の先生方のご健勝とご活躍を祈念しております。

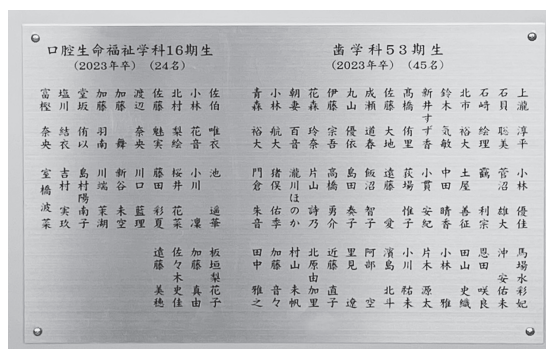


小野教授、高橋教授、天谷准教授

また、例年通りに歯学科53期生45名・口腔生命福祉学科16期生24名の名前が刻まれた卒業生ネームプレートも設置しました。学部4階渡り廊下にはこのネームプレートとともに、過去の卒業生全員分のプレートが掲示されています。学部にお越しの際には是非、ご覧ください。



2023年度総会 ZOOM参加者と一緒に記念撮影



4月には総会と学術講演会が行われて、今年度の活動を開始しました。

6月に入ってすぐに「研修歯科医支援塾」が行われました。大学院生や勤務医になられた前・研修医さんや先輩の先生等から講師になっていただ

き、「研修医時代の話」「進路の決め方」「現在の生活」等を楽しくお話をして頂きました。研修歯科医の皆様の、現状の悩み解決、進路決定、将来のビジョンの描き方等の参考になりましたでしょうか。



講演される松崎奈々香先生（歯学科48期）と日向 剛先生（歯学科41期）



講演終了後に講師の先生を囲んで

その2週間後には、「歯学科6年生・口腔生命福祉学科4年生への同窓会説明会」を開催しました。ここ3年間はYouTubeなどで動画配信を行っての説明会でしたが、今回は4年ぶりに対面での開催に踏み切りました。

同窓会の活動内容の説明会のみで交流会（懇親会）は開催しませんでした。学生さんの顔を見て直接お話できるのはありがたいと思いました。参加された学生の皆さんが来年3月に無事卒業され、歯学科54期、口腔生命福祉学科17期として同窓会正会員になれるのを祈りたいと思います。

これからも同窓会からは様々な方法で同窓会員



説明会冒頭の有松会長の挨拶

に情報を発信し、会員相互の親睦を図り、暖かく、かつ、強い同窓会を目指してまいります。ご理解とご協力をよろしくお願いいたしますと存じます。



説明会後に出席者全員で撮影



講演会を拝聴して

歯学科25期生 古室 浩明

野村教授の同窓会学術講演会を拝聴し、最近の保存の事情が垣間見えた気がしました。

私は25期生なので卒後30年経っています。当時新大歯学部で最新の教育を受けてきたわけですが、今は当時とは全く違う内容になっていて時代からだいぶ取り残されているのを痛感しました。

『モダン・エンドドンティクスの実際』では三種の神器の必要性が説かれ、難治性の感染根管をどこまで除菌化していったら予後が良いかをラットの研究を通して話されていました。75%の除菌で75%の根尖病巣が治癒という件は臨床実感とも一致すると思いました。

『AI時代の歯内療法』では難治性根尖性歯周炎に対してルートZX3の高周波照射で50-60%の有効性を示す話や自己血製剤、NiTiファイルと専用アプリで根管形成の全自動化の話がありました。私には何といても全自動電動歯ブラシの話が印象に残りました。

『う蝕予防管理の実際』では専門医制度、国民皆歯科健診の話から現在の新大歯科外来の姿に話は移り、重点はドリル&フィルに置かずICDASによるリスク評価に基づくう蝕管理を行っているとのことでした。また根面う蝕を歯肉縁上型、越

境型に分け、その細菌叢の違いを遺伝子解析により研究しているとのこと。先生の研究が進めば厄介な根面う蝕の予防管理が期待できそうでした。

『変わりゆくう蝕治療』ではリスクの高い人や歯に対して口腔機能管理を徹底し、早期発見・長期管理でう蝕をつくらず、治療をしない時代に突入していることを伝えていました。そして主役は歯科医師から歯科衛生士へと締めくくっていました。

思えば30年ほど前、我々が学生時代の頃からこれからは予防の時代だと言われていました。しかし当時予防で食っていくのは難しく、ドリル&フィルの保存や補綴がまだまだ主役でありました。歯科医院の院長は、経営と社会貢献の2足のわらじを履かざるを得ない。治療重視は必要悪という面が強かったように思います。

近年インターネットによる検索で医師のみが知



講演後、野村先生には感謝状を贈呈しました



りえたことが容易に患者さんにわかるようになってきました。ことに生成AIの進歩は目覚ましく、口腔内写真やレントゲン写真からう蝕や歯周病の診断に類することをこなしてしまう。すると歯科における知識や診断の専門性が低下し、患者さんからの信頼関係の低下に結びつく。

働き方改革による代替、時短も叫ばれている。我々はいったい治療という仕事の位置付けをどう落とし込んでいけばいいだろう。そして我々のあるべき歯科医師とはどんな姿だろう。いろいろ考えさせられる講演会でした。



セミナー（地域のインフラ歯科になろう！～医療インフラとしての歯科医院～）を受講して

歯学科53期生 石 崎 絵 理

「地域のインフラ歯科になろう！～医療インフラとしての歯科医院～」を受講いたしました。私は歯科医師1年目で進路も具体的に決まっていなかった状況でした。ただ両親が地方で開業しており、ゆくゆくは継いで行きたいと思っており、今後の歯科医師人生の中で何か役立つのではないかと受講にいたしました。

特に印象的であったことはインフラ歯科という考えでした。渡部先生のおっしゃるインフラ歯科とは「通院患者だけでなく、地域全体を対象とすること、幅広い分野の診療を行うこと、生涯を通じて健康を守ること」です。患者さんとの点や線でのかわりではなく面での関わりという考え方です。新潟大学病院総合診断部で研修をしている私にとって、患者さんが来院されることを前提として診療が行われているため、地域全体を対象にしていることや生涯を通じてメンテナンスを行う考えは新鮮でした。大都市圏、とくに大都市近郊での高齢者の激増、地方部での高齢化率の増加により治療からケアへ、ケアから予防へ生涯メンテナンスの考え方は、今後の歯科医療に非常に重要な考え方だと感じました。要介護高齢者の調査では、歯科医療や口腔健康管理が必要である高

齢者は64.3%でありましたが、そのうち、過去1年以内に歯科を受診していたのは、2.4%であったことから地域包括システムに歯科が今後係わっていく必要性を強く感じました。また渡部先生ご自身のお話の一部に、地域全体が歯科を受診できるように介護施設へのボランティアを始めたことや、子どもに対して生涯に渡って継続的に受診するようにわかりやすく紙芝居を使用し説明しているとあり、献身的なお人柄だと感じました。そして最終的に地域全体で子どもの頃から口腔ケアの重要性を理解し、一生涯自分の歯で食事ができることができるようになれば理想的だと思いました。

講演を拝聴し、内容もわかりやすく、今後歯科医師としてどのように歩んでいきたいか考える良い機会となりました。最後に、講演していただいた渡部先生、セミナーを企画してくださった学術委員の皆様へ御礼申し上げます。



講演中の渡部先生

